

生存科学研究ニュース

VOL.19. No.2 2004.7 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

武見太郎生誕 100 年記念シンポジウム



財団法人生存科学研究所では、本年が研究所創設者である故武見太郎氏の生誕 100 年に当たることから、先に機関誌『生存科学』において、特集＝武見太郎先生 生誕 100 年記念号を発行いたしました。この機会に、故人が長年唱導してまいりました「生存の理法」の今日的意義を改めて世に問うため、生誕 100 年記念シンポジウムを行いたいと企画を進めております。

そこで本シンポジウムでは、すでに武見太郎氏が指摘していた人類生存の永続性に重大な影響を及ぼす基本的ファクター（人口、環境、資源、技術、制度）の要因のうち、環境と資源とを中心として危機といわれることの現状認識と、それを克服するための政策について提言することを目的としています。

（詳細は第 4 面をご覧ください。）

武見太郎生誕 100 年記念シンポジウム

に際して

理事長 江見 康一

今年、故武見太郎氏の生誕 100 年に当たることから、本研究所でもそれを記念して、「生誕 100 年のシンポジウム」が企画されている。

武見氏は、1904 年 3 月 7 日に生まれ、1983 年 12 月 20 日に 79 歳で亡くなられたが、1904 年は日露戦争勃発の年であり、武見氏が生きた 20 世紀は、2 回の世界大戦に代表される「戦争の世紀」であった。他方、20 世紀はノーベル賞が 1901 年に制定され、物理学、化学の分野での画期的な発見がなされた「科学技術の世紀」としても、また遺伝子の発見、遺伝情報の解読など「生命科学の世紀」としても特徴づけられよう。ただしその科学技術は「戦争の世紀」に加担し、軍事兵器を大量殺戮型にすることによって戦争の様相を一変させたことは、第 2 次大戦が原子爆弾の投下によって終わったことに象徴されている。

武見氏は慶應義塾大学医学部を経て、1937 年に仁科芳雄研究室で多くを学んだが、師の仁科氏こそ原子力の平和利用を強く唱えた人であり、武見氏はその影響下で原子物理学の医学的利用を自らの任として考えるようになっていく。同時に、仁科氏のライフサイエンス的思考によって、医学に生物学的考え方を取り入れようとするなど、医学を科学のレベルに引き上げると同時に、それを人間の学として高める発想を持つに至ったように思われる。

武見氏が昭和 32 年に日本医師会長に就任した後も、医師会長としての政治的側面

とは別に、科学者の眼で医療を眺める学問的態度は変わらず、それを裏付ける武見理論が次々展開されたことは、『国民医療年鑑』に発表された論文に明らかであり、その集大成こそが、「生存科学」であったといえよう。

武見理論の特性はその先見性にあった。これについての事例は数多いが、人口ピラミッドの将来の変容をいち早く見通して、人々の眼が経済成長のみに注がれていた昭和30年に、すでに来るべき「老人問題」に思いを馳せ、「今日ほど社会が高齢化現象について合理的な社会的解決を迫られていることはない」と喝破していることである。

(『中央公論』昭30)。この武見氏の予想の正しさは15年後の昭和45年に、老年人口の対総人口比率が7%を超え、当局が慌てて高齢化対策に取り組んだことによっても知られよう。

他方年金問題についても、合計特殊出生率が低下し、人口構造が釣鐘型になる傾向にいち早く注目して「あと20年経ったら年金制度は必ず崩壊する」と予言し、法律が人口という社会生物学的要因を無視して一人歩きしている点の矛盾に警告を発している。このことは、20年後の平成16年夏の参議院議員選挙において、年金問題が最大の争点になったことから伺い知れよう。

武見氏の見識は他にもあるが、とりわけ20世紀における文明社会の進展が、人間の生存条件を規定する「資源と環境のカベ」に逢着していること、したがってこのカベに対してどう対応するかが21世紀の基本的課題であることを、ことあるごとに警告していることである。昭和50年の世界医師会東京大会で揚げられたメイン・テーマが「医療資源の開発と配分」であったのはその1例であるが、21世紀は20世紀の「戦争と科学技術の世紀」から「資源と環境の世紀」へという転換が必然性を持つという認識こそ、武見太郎生誕100年記念シンポジウムが目指す基本的方向であろう。

平成16年度第1回脳・心と教育研究会

表記研究会は「人間はどんな動物か？」と題し、2004年4月14日(水)15:00より、(株)日立製作所基礎研究所において東京大学大学院情報学環助教授、佐倉統氏を招いて開催された。

本研究会は生存科学研究所の評議員であり、(株)日立製作所フェローの小泉英明氏を責任者として本年度よりスタートしたものである。今回はその第1回目として、メンバーの一人である佐倉氏を招き、進化論的見地から人間の脳の発達、さらにミーム概念について講演が行われ、遠隔地よりテレビ参加した(株)日立製作所中央研究所の若手研究者も加わり、活発な議論が行われた。

人間の独自性は、その脳にある。高度な学習能力、それを伝える言語などのコミュニケーション能力、教育システム、そしてそれらを蓄積していく文化的な営為。文化情報の伝達単位は「ミーム」と呼ばれるが、遺伝子とミームの間には利害関係の対立やギャップがある。生物としての人間(遺伝子)が石器時代の環境に適応しているのに対し、文化的存在としての人間(ミーム)は現在の環境を作り出している。この巨大なギャップが、教育問題や民族問題など、現代のさまざまな問題の遠因になっていると考えられる。生物学的存在と文化的存在とをどうやって接続させ、このギャップを埋めていくか——それが、科学にもとづく21世紀の思想の課題であろう。(以上)

第1回老年期における安全保障研究会

本研究会は本研究所会員であり、弁護士神谷恵子氏を責任者として本年度よりスタートしたものである。

今回はその第1回として「自立的に生きるためのQOLの充実及び日常生活での老

化予防」と題し、4月22日(木)18:00より、メンバーである立命館大学経営学部教授、三浦正行氏を招いて開催された。三浦氏は、保健学の立場から、高齢者を「発達主体」として見つめ直してゆくことが、高齢者への問題の出発点であることを指摘し、ご自身の介護経験を踏まえ、身体的ケーススタディを示しながら、いかに「加齢」を「老い」に結び付けることなく個人の尊厳を保って生きていくかについて報告かつ問題提起がなされた。

この問題提起に対し、研究会では社会的側面及び個人的側面から活発な議論がなされた。

社会的側面から“高齢者の捉え方”について人間が個体としてどのような発達を遂げていくのか、正確に理解をする、老人に対する否定的な考え、偏見をなくす教育活動を進めること、具体的に住居近接の現在あるスポーツ施設を利用して筋肉の硬縮を和らげるプログラム作りを進め、高齢者の肉体系から「老い」の予防を図ること、等々があげられた。

また、個人的側面からは、まずは個々人の意識の改革を図り、日常生活の中での基本的な「食事」「運動」「排泄」「入浴」の習慣を若いうちから自立的に確立しておくことが重要である。

さらに、自立できなくなったときに備えて、元気なうちから自己の生き方を考えておくことが大切であり、この点については、今後の研究会に繋ぐテーマとなった。

平成16年度第1回理事会・評議員会

平成16年度第1回理事会・評議員会は5月19日(水)銀座教会内東京福音館センター集会室において開催された。出席者は以下の通り(委任状による出席を含む)。
理事会：青木清、江見康一、大塚正徳、大

林雅之、小島静二、鈴木雪夫、高木廣文、津谷喜一郎、中谷瑾子、中山茂、府川哲夫、藤原成一、丸井英二

評議員会：浅野茂隆、石井威望、伊藤正男、梅園忠、江橋節郎、太田幹二、香川保一、粕谷豊、川崎富作、吉川暉、小泉英明、清水博、田中慶司、筑井甚吉、藤井正雄、向山定孝、村上陽一郎

審議内容：平成15年度の事業報告及び収支計算書について執行部より報告がなされ、審議の結果、全員一致で承認された。なお、平成15年度の事業は以下の通りであった。

1. 川崎病研究会
2. 21世紀におけるバイオエシックスの構築研究会
3. 医療システム改革の基礎研究会
4. 循環型社会と生存科学研究会
5. 武見太郎研究会
6. 代替医療と国民医療費研究会
7. 自主研究中長期基本構想委員会
8. 共同研究：日本川崎病研究センター
9. 広報(生存科学研究ニュース)
10. 学術誌「生存科学」

研究所日報

- | | |
|----------|------------------------|
| 4月14日(水) | 脳・心と教育研究会 |
| 4月22日(木) | 老年期における安全保障研究会 |
| 5月19日(水) | 平成16年度第1回理事会・評議員会 |
| 6月21日(月) | 武見太郎生誕100年記念シンポジウム打合せ会 |
| 6月29日(月) | 平成16年度第1回常務理事会 |
| 7月15日(木) | 代替医療と国民医療費研究会 |
| 7月27日(火) | 老年期における安全保障研究会 |
| 9月4日(土) | 武見太郎研究会 |